

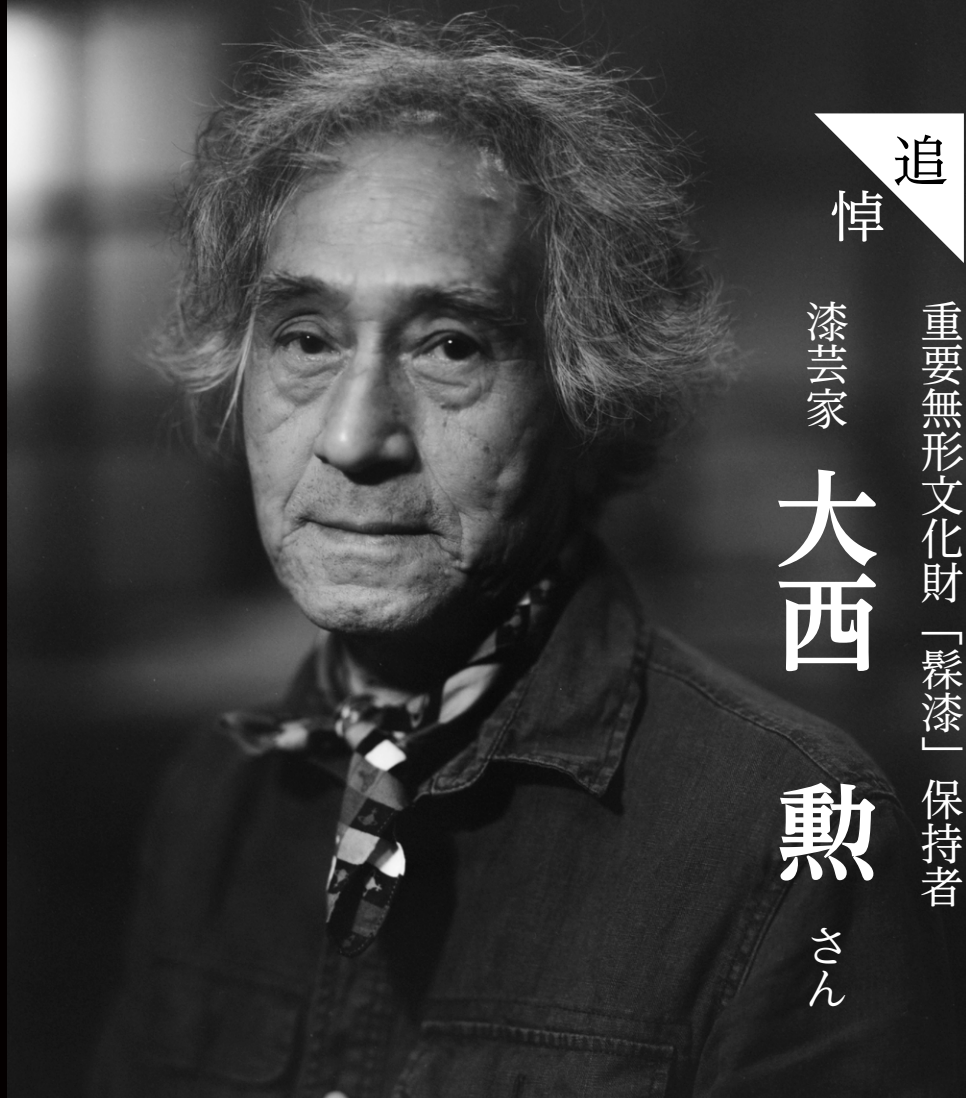
追悼

重要無形文化財「髹漆」保持者

漆芸家

大西 勲

さん



大西 勲さん

昭和19年福岡県中間市生まれ。昭和49年赤地友哉氏（人間国宝）に弟子入り。昭和55年妻の故郷下館市へ転居。昭和57年石川県輪島漆芸技術研究所、香川県立高松漆芸技術研究所で講師を務める。昭和59年自宅の一室を工房にし、独立する。平成14年重要無形文化財保持者に認定。平成15年市民栄誉賞受賞。平成16年紫綬褒章受章。

重要無形文化財「髹漆」保持者（人間国宝）で、市民栄誉賞を受賞し、

筑西ふるさと大使でもある大西勲さんが、5月10日にご逝去されました。

大西さんは、器の基礎となる様地を曲輪でかたち作り、何層にも渡って漆を塗り重ねていく髹漆の技法で、すばらしい作品の数々を世に送り出しました。漆芸産業に多大な影響を与えた大西さんの功績を紹介します。

生涯職人を貫いた「孤高の漆芸家」

大西さんは、福岡県中間市出身。北九州の炭鉱の町で生まれ育ちました。中学生になると父親の大工仕事を手伝い、見よう見まねで指物の技術や道具の扱い、木材の性質を覚えました。中学卒業後、担任の先生の紹介で「阿部木工所」に就職。木工所での仕事は技術を習得する日々となり、後の漆器づくりの糧となりました。

自然にたどり着いた今

昭和45年、25歳の時に鎌倉彫の作家である木内晴岳氏に弟子入りし、ひたすら製作に没頭。この時の大西さんは、仕事に対し熱量があり、雑用でも何でも積極的に取り組み、全てのことに対し懸命に打ち込んでいました。そんな鎌倉彫の修行は約5年で終了し、30歳の時には、髹漆で人間国宝となった赤地友哉氏に弟子入ります。赤地氏

との出会いは思いも寄らないことでした。友人に誘われて赤地氏の講演会に行った帰り、財布を落としてしまいました。その財布が縁を結び、拾った赤地氏から電話をもらい、家を訪ねた際に無理を承知で弟子入りをお願いしたところ、快く受け入れてくれたそうです。「私の人生全般に言えることなのですが、人生は本当に偶然の連続です」と語っています。

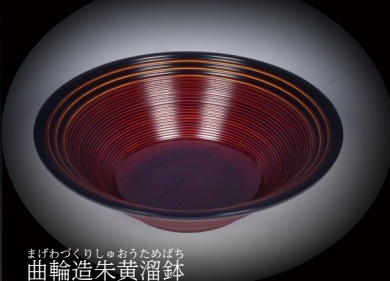
赤地氏と過ごす日々の中で、大西さんはさまざまな技法や知識を吸収し、漆工としての基盤をつくっていききました。「おもしろかったですよ。研究しなさい、勉強しなさいって、先生は自分に全部やらせてくれた。今までは誰からもそんなふうには言われたことがなかったもんでね」と当時を振り返っています。

昭和55年、結婚を機に妻のかをるさんの故郷下館市へ転居。その後、自宅

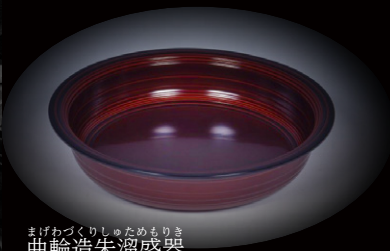
究極の美を追求した永遠の職人



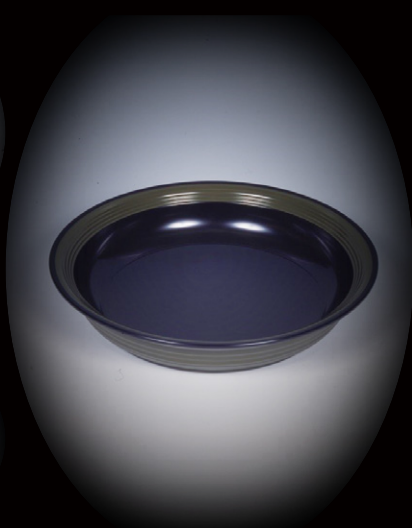
写真提供：今井 卓氏



まげわづくりしゅうおうためばち
曲輪造朱黄溜鉢



まげわづくりしゅうおうためりき
曲輪造朱溜盛器



まげわづくりこりよくしつりき
曲輪造黒緑漆盛器

大西さんが生まれ育った中間市は、石炭産業が盛んで炭坑のまちと呼ばれていました。大西さんの作品は、黒と赤を基調としたものが多く、石炭の色「黒」と石炭が燃える色「赤」を表現しています。



の一室を工房にし、ひとりの漆芸家として歩んでいくことを決心します。その翌年、第32回日本伝統工芸展に下館の工房で製作した「曲輪造黄彩月文盤」(まげわづくりおうさいきんもんばん)を初出品。その後も師の技を守りながら、日本伝統漆芸展、伝統工芸新作展など多くの展覧会に出品し、文部大臣賞、文化庁官賞、日本工芸会総裁賞など、さまざまな賞を受賞しました。

人間国宝の務め

工芸展に初出品してから10数年が経った平成14年、57歳の若さで髹漆の人間国宝に認められました。「私は肩書とか役職とか、そういったものは気にしない人間なんですけどね。とはいえ、自らの技術を伝承していくのも、人間国宝の務め。回数は減りましたが、年に数回は講演会を開いています」と人間国宝の在り方を語っています。

令和に入ってから展覧会を開催し続け、しもだて美術館では「筑西の至宝 美の巨匠展」、廣澤美術館では「美しい漆芸の世界 人間国宝 大西勲展」を開催しました。人間国宝と言うと近寄りづらいイメージがありますが、廣澤美術館での展覧会で行われた「鉋がけ体験」では、来場者と気さくに話しながら指導する大西さんの姿が見られました。「工具や材料に触れて、作品を肌で感じてほしい。さまざまな見方

が私の創作の刺激になるので、自由な発想で作品を見てもらいたいですね」と大西さん。飾らない一人の漆芸家としての大西勲がそこにいました。

漆器の木地は、木曽地方の樹齢数百年の檜を使い、漆は、大子町産の漆樹から採取した天然のままの漆を自ら精製するほど、作品づくりにこだわりを持っています。「私は木から漆をいただきます、木を切ってものを作ります。木の寿命より一日でも長く残る作品を作れたらと願っています」と感謝と敬意を口にしました。

年月が経つにつれて漆は透明度を増し、器は成長します。大西さんはまだ見ることでできない究極の美を追求した未来の姿を見据えて作品づくりをしていました。自身の信念を追求した作品づくりに一生を捧げ、その独自の創造力は漆芸産業界全体にも大きな影響を与えた大西さん。

謹んでご冥福をお祈りします。

